

学校経営計画

狛江市立緑野小学校 校長 亀田親子

* ◎・下線は重点

1 学校の教育目標

児童の徳性・感性・知性や体力を伸ばし、持続可能な社会の担い手となり、国際社会に貢献する日本人の育成を目指し、次の教育目標を設定する。

- ◎共に生きる子（自他を大切にし、他者と協働する力）
- 美しさを感じる子（豊かな感性をもち、他者と共感する力）
- よく考える子（自らの考えをもち表現し、課題を解決する力）
- 健康で頑張る子（心身を健全に保ち、最後までやり抜く力）

2 目指す学校像

- 児童一人一人が笑顔で学び、生き生きと生活できる学校
- 教職員がやりがいをもち、職務に対する達成感を得られる学校
- 保護者・地域が教育活動を信頼し、支えていきたいと思う学校

3 学校経営の基本的な方針

「学校の主役は子供、学校教育の要は教職員、支えてくださるのは保護者・地域」

「チーム学校・チーム緑野」として組織的に「みんなてみんなを育てていく」

(1) 危機管理を徹底した学校経営

- ・児童が自らの命を守る実践力の育成（教職員一人一人の危機管理意識の向上と持続）
- ・教職員の服務事故ゼロ宣言（想定外を想定内にする）
- ・安心・安全を徹底した綿密な授業計画（週案への記入・本時の安全のポイントの指導等・教育課程の進行管理）
- ・安全な環境作り（整理整頓された教室、教材室、運動場、体育倉庫等 死角を作らない）
- ・安心・安全な給食の提供（全ての教員が食物アレルギー対応を理解）

(2) カリキュラム・マネジメントの視点に基づいた学校経営

- ・協働的な学びと個別最適な学びの実現（令和の日本型学校教育）
- ・昨年度までの狛江の教育21研究協力校の実践を基にして、引き続き「生命と人格・人権を尊重する態度の育成」を目標に人権教育を推進する。
- ・教科横断的な視点、教育課程のPDCAサイクルの確立、地域等の物的・人的資源の活用
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行い、「教師が教える」から「児童が主体的に学ぶ」授業への変換を図る。
- ・校内研究や小教研・研修等で学んだ成果を生かしながら、よりよい実践を重ねていく。
- ・ICT 機器、情報機器やデジタル教材等を活用し、効果的な学習指導を図る。

(3) 学年団・学級団（えのき・ふたば）を生かした学校経営（令和6年度小学校教科担任制等推進校）

- ・学年担任制を導入し、学年団（3～5人）の教員皆で学年児童全員を育てていく意識もつ。学級担任であるとともに学年担任であるという意識を常にもち学年同一歩調を進める。

- ・えのき、ふたばの教員が協力して、学級や教室の児童全員を育てていく意識をもつ。
- ・高学年は教科担任、4 年以下の学年は学年の状況に応じて、交換授業や一部教科担任を行う。組織的に児童理解を深め、様々な問題の未然防止や早期解決・授業の質の向上・OJT の推進を図る。
- ・校内委員会を活性化させるとともに、特別支援学級があることや特別支援教室拠点校であることを強みとし、特別支援教育を充実させる。
- ・WEBQU や面談等を有効活用し、一人一人の児童理解に役立て、好ましい集団作りを行う。

(4) 地域との連携を推進する学校経営

- ・令和 6 年度は開校20周年の記念の年である。児童・教職員・地域・保護者と共に、地域に根差した学校づくりを加速し、愛校心を育む。
- ・一中ゾーン、四中ゾーンのコミュニティ・スクールとして、地域、保護者との連携や学校間連携を充実させる。探求的な学びを通して、コミュニティ・スクールの各校と交流を図りながら、義務教育 9 年間を見据えた教育活動を展開する。

(5) 「働き方改革」を推進する学校経営

- ・高学年における教科担任制や 4 年生以下の一部教科担任制・交換授業により、教材研究の時間軽減を図る。
- ・リモートワークシステムを有効活用し、長時間勤務をなくす。
- ・SSS や EA を活用する。
- ・ペーパーレス化を推進する。
- ・校務分掌等、現状で維持すべきものと、改革できるものを見極めながら、アイデアを出し合い、働き方改革を推進する。
- ・自身でタイムマネジメントを行い、退勤時間を意識する。学校衛生委員会を活用し、教職員の心身の健康を守り、働きやすい環境づくりを行う。
- ・働き方改革は、教職員自身のためであり、学校教育の質の向上のためであることを認識して行動する。

*研究指定等

小学校教科担任制等推進校(令和6~8年度)

青少年赤十字加盟校

4 本校の重点目標と具体的な取組

上記の成果と課題を踏まえ、学習指導要領に基づき、重点目標及び具体的な取組を示す。

【本校の重点目標と具体的な取組】

重点目標:「チーム学校・チーム緑野」として、教職員が組織的に教育活動を行うとともに、保護者・地域・関係機関との連携を推進し、教育活動の一層の充実を図る。下線部は重点

	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策(例)
人権教育の推進	(1) 全教職員が人権尊重の理念への理解を深め、いじめ・不登校の未然防止に取り組む。	「いじめ見逃しゼロ」を目標にいじめ未然防止対策の取組を推進する。	学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめ未然防止に関わる取組を年間通して、意図的かつ継続的に実施する。また、地域人材も積極的に活用する。
		<u>WEB-QU を効果的に活用し、よりよい集団づくりに取り組む。</u>	集団としての質を高めると共に、学力の定着状況に応じた指導を工夫することにより、一人一人の能力の伸長を図る。また、結果を個人面談等で保護者との連携にも活用していく。

		<u>校内研究と連携させた取組を行い教職員の人権感覚を向上させる。</u>	昨年度までの研究協力校の実践を基にして、教職員が人権尊重の意識を高め、全教育活動で生命と人格・人権を尊重する態度を育成する取組を進める。
	(2) 特別支援教室拠点校、特別支援学級設置校として、特別支援教育を充実させる。	特別な教育的ニーズを必要とする児童や不登校傾向にある児童への支援を図る。	<p>学年団では、気になる児童の情報を日常的に共有する。校内委員会では、全校で児童理解を図るとともに、<u>教育相談員、SC、SSW 等の関係機関と連携して、特別な教育的ニーズのある児童の問題解決に組織的に取り組む。</u></p> <p>きめ細やかな児童対応や学校と家庭の支援事業等の活用を図り、不登校の未然防止に努める。不登校傾向児童への支援については、積極的に行う。担任は定期的に連絡・声かけを行い、帰属意識をもたせる。必要に応じてタブレット端末も有効活用する。</p> <p>特別支援教室（ふたば学級）と連携し、児童個々の実態に応じた指導方法について情報を共有し、落ち着いて学級で過ごす環境を整える。</p>
	(3) 児童と児童、児童と教師との好ましい人間関係の育成を図り、豊かな感性や社会性を育てる。	<p>学年団が学年担任としての意識をもち、全学年の児童にかかわり指導する。</p> <p>教師と児童とのふれあいを大切にする。</p> <p>児童の規範意識を育てる。</p>	<p>高学年の教科担任制や 4 年生以下の学年内での交換授業を取り入れながら、全学年の児童理解を図る。</p> <p>学年団で共通理解し、課題のある児童には学年体制で指導・支援を行う。</p> <p>登校時の門や朝の教室での出迎えを通して、児童の心の安定を図り、1日をスタートさせる。休み時間の遊びを通して児童理解を深め、学齢に応じた、教師・児童との望ましい人間関係を構築する。</p> <p>生活指導の重点項目とする。「緑野小のきまり」を共通理解し、統一した指導及び徹底を図る。</p>
生きて働く力と国際社会で活躍できる力の育成	(1) 児童がグローバル社会で活躍できるように、資質・能力を育成する。	障がい者理解教育の実践を継続する。	障がい者理解教育や国際理解を視点とした取組を、総合的な学習の時間を中心に実践していく。また、特別支援学級や特別支援学校等との交流を継続・充実させる。
		外国語教育や外国の文化に触れる機会を充実させる。	専科教員や ALT を有効に活用し、外国語教育を充実させる。 TGG や地域のイングリッシュスピーカー人材、イングリッシュウィーク、国際交流コンシェルジュを活用し、外国語や外国の文化に触れる機会を増やす。
		国や郷土を愛する心を育成する。	<p>道徳教育を通して、愛国心や郷土を大切に思う心を培う。</p> <p>市民パレード等の地域行事に参加したり、市内の施設や資源を活用する機会を増やしたりすることで、狛江市を愛する気持ちを育成する。</p>
(2) 児童の体力向上と健康教育の推進を図る。	体力向上の取組を推進する。	校庭・体育館での遊び時間を確保する。縄跳びや持久走月間の取組等、年間を通して運動に取り組む機会や多様な運動を体験できる機会を設定し、自己の目標に向け楽しみながら体力の向上を図る。	

			<p>保護者の家庭でのサポートや参観を計画的・意図的に行い、児童の体力・健康についての意識を高める。</p> <p>アスリート派遣や体育を専門とする教師の授業等を活用し、体力向上への意識を高める。(高学年教科担任制)</p>
		健康教育を通して、たくましい心と体を育てる。	体育指導・体育的行事の工夫、保健指導・学習、食育等を通して、児童自らが健康的な生活を送ろうとする態度を育てる。
コミュニティ・スクールの推進	(1) 地域社会に開かれた学校づくりを推進する。	地域と連携・協働した教育活動を展開する。	<p>授業公開等を活用し、保護者・地域と連携した授業・行事を企画・実施する。また、地域コーディネーターを活用し地域人材を招聘した出前授業を行ったり、地域の行事に参加したりして学校との信頼関係を築く。</p> <p>清掃活動や、近隣保育園・幼稚園等との交流を充実することにより、地域貢献への意識を高めさせる。</p>
		一中ゾーンのコミュニティ・スクールとして小中連携を推進する。(四中ゾーンとの連携)	<p>探求的な学びや特別支援教育を中心に交流活動を通して一中ゾーンのコミュニティ・スクールとしての取組を推進していく。特に教員レベルでの情報共有を計画的に行う。</p> <p>四中ゾーンにも所属しているので、四中・五小との連携も推進する。</p>
	(2) 持続可能な社会の実現を目指す学校体制を構築する。	児童が地域社会の一員として自覚し、地域にかかわろうとする心を育む。	<p>特色のある教育活動であるブラスバンド活動やミュージック・ベルの活動を通じて、児童の達成感・自己有用感を味わわせると共に、地域に貢献する意識を高めさせる。</p> <p>地域の高齢者施設、障がい者施設、商店、農家等との交流を通して、地域と人を大切にすることを育む。</p>
		本校の特色である学校図書館の積極的な活用を図る。	<p><読書センターとして>質の高い読書習慣を身に付けさせる。(読書旬間の設定・こまね本の森の活用・緑野文庫の完読を目指す等)</p> <p><学習情報センターとして>学校図書館年間活用計画を基に、各教科領域の探究的な学習を充実させる。</p>
	幼保小中の連携を密にし、小1プロブレム、中1ギャップへの対応やキャリア教育を図る。	小学校間、小中学校間の連絡を密にする。また、学校訪問、幼保の学校訪問等で、幼児・児童、児童・生徒間交流を行うことを通して、安心感やあこがれをもたせ、円滑な接続を目指す。	
授業の改善・充実	(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、教師が授業改善を推進するとともに、児童自らが学習改善を行えるようにする。	教師が日々指導方法を工夫・改善し授業を充実させ、児童に基本的な学力や思考力・判断力・表現力を身に付ける。	<p>良好な学級集団づくりを基盤として、基本的な学習規律の形成を図るとともに、協働的な授業を展開しながら、個の実態に応じた個別最適な学習を行う。</p>
			<p>狛江の教育21研究協力校として、全教科を通して、学習や生活の基盤となる言語能力のさらなる育成を図る。</p>
			<p>学年担任制を活用し学年内で交換授業を実施し、授業の質の向上を図る。</p>
			<p>算数では、習熟度別少人数指導を実施する。算数習熟度別少人数委員会を中心に、計画的な指導及び評価を行う。</p>

			思考力・判断力・表現力の育成を目指し、ICT 機器や思考ツール等を効果的に活用する。
			外国語科や外国語活動等を通して、児童のコミュニケーション能力の向上を図る。
	児童が学習者として主体的に学ぶ意欲もち、学習に取り組む。		(10分×学年)を目標として、復習を中心とした家庭での学習時間を推奨する。タブレット端末(ミライシード等)及びドリル等を効果的に活用していく。
	学校全体で、学習規律・生活規律を統一する。		学習規律・生活規律を統一することで、どの教員が授業を行っても指導し易い環境を作り、授業時間の確保と質の向上につなげる。
(2)教育活動の質の向上を図るため、学年団が協力しカリキュラム・マネジメントを推進する。	教科横断的な視点で、主体的・対話的で深い学びを目指す。		ESD カレンダーを基に、教科横断的な視点で教育活動を実施する。
	地域や児童の実態に即した教育課程を編成し、評価を行う。		学校全体・学年団・学級団として、常に PDCA サイクルを計画的・組織的に実施し、教育活動の質を高める。
	地域との連携を図り、積極的に地域資源を活用する。		開校20周年記念行事を通して、地域、保護者、学校が協力し、心に残る記念の年にするともに、児童や地域の方々の愛校心を育む。 地域コーディネーターを有効に活用しながら、地域人材・必要な資源を発掘しながら、教育活動に生かす。
(1)ICT機器等を活用した教育活動を推進し、児童の協働的な学びや個別最適な学びを支援する。学習環境を構築する。	児童や教師が学習や生活の中で、タブレット端末を有効に活用する。		児童がタブレット端末の中で学習に必要なソフトを選び、学習や学校生活の中で積極的に活用する。(ミライシードの活用)
			教師が教育活動を効率的・効果的に行うために、教育データの共有や活用を図る。
環境の整備	(2)教職員自らが自身の資質・向上を図るとともに、職層に応じた人材育成を行う。	教師として、常に研究と修養に努め、資質向上を目指す。(OJT 推進)	日常の教育活動で OJT を推進するため、学年内での教科担任制・交換授業を通して、教員相互の指導技術を学ぶ。 3~4回同じ授業を実践することで、自らの授業において PDCA を行い、授業改善を図る。
		自己のキャリアを見つめ、伸ばす。(OFF-JT の推進)	管理職との指導・助言を通して、教師の自己啓発を図る。各種研修会に意図的・計画的に参加させ、指導力を身に付けさせる。
		教員に対し自己研鑽に努めさせる。	教員自身のキャリアについて自己申告等を通して意識をさせる。必要な研修会や研究会への参加を促したり、書物を紹介したりする。
		若手教員育成の育成を推進する。	主幹教諭・主任教諭は、職層に応じた人材育成の視点をもち、若手教員を育成する。 主幹教諭・主任教諭を中心に、研修会を企画し若手教員の資質向上を目指す。
		働き方改革の推進するため、分掌事務の効率化及び適正管理を行うと共に、教職	

	員の心身の健康を守る。	学校衛生委員会を月1回実施し、必要に応じて、産業医との面談を推奨する。 産業医からの指導・助言を基に、働きやすい環境づくりを行う。
	効果的な教材研究等を推進する。	学年内での交換授業・一部教科担任制を通して、教員の教材研究にかかる時間を削減する。
	服務事故根絶のため、年3回の服務防止研修や服務事故防止月間だけでなく、年間を通じて服務事故防止研修を実施する。	日常的に服務事故処分手例を説明したり、会話の中で服務に関する話題を出したりしながら、服務事故防止研修を継続し危機管理意識を高める。 長期休業前には、ロングの服務事故防止研修を行う。これらの取組を通じ、 <u>服務事故を絶対に起こさないという意識を培う。</u>
(3) 児童の安全確保に向けた体制の構築と安全教育を推進し、危機管理を徹底する。	危険の予測や回避に関する実践的な能力や態度を形成する指導を行う。	生活指導部を中心に、危険の予測回避の場面を想定した避難訓練を計画的に実施する。教職員や児童に <u>予告しない訓練場面を設定することで、児童自らが自分の命を守る行動をとることができる力を身に付けさせる。</u> 安全教育の年間指導計画に基づき、日常的・定期的・特設の時間に指導を行う。
	自然災害発生時における避難所開設に向けた体制を整える。	避難所運営協議会と連携を図り、自然災害時に円滑に避難所開設を行う。学校開設時においては、児童の安全を確保する。
	教職員及び保護者に対し、事件・事故の際に、児童の安心・安全を確保する手段を周知する。	教職員に危機管理マニュアルを周知するとともにミマモルメのシステムやホームページを活用し、緊急時の連絡体制を整える。
(4) 児童の食の安全と健康を守る。	安心・安全な給食の提供を行う。	食物アレルギーに対する知識・対応を全ての教職員が身に付け、実践できるよう研修を行う。 栄養士・給食業者との連携を取り、安全な給食提供を行う。
	児童自らが自身の健康を守る力を身に付ける。	アレルギーの有無にかかわらず、アレルギーに対する知識や対応を知り、自他の健康を守るができるよう指導する。